関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

ストラスクライド大学におけるカウンセリングのディプロマコース―臨床心理士教育への示唆―

著者	中田 行重
雑誌名	関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要
巻	4
ページ	51-58
発行年	2013-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/8020

体験報告

ストラスクライド大学におけるカウンセリングのディプロマコース
── 臨床心理士教育への示唆 ──

関西大学大学院心理学研究科　中田　行重

要約

筆者は本学（関西大学）の在外研究制度を利用し、英国のグラスゴー市にあるストラスクライド大学（University of Strathclyde）を訪問した。そこのカウンセラーのディプロマコースの教育研究を視察することが目的の１つであった。本拙論は、その教育内容の概要を紹介し、わが国の臨床心理士教育についての示唆を得ることが目的である。

キーワード：ストラスクライド、ディプロマ、PCA、教育、臨床心理士

1. ディプロマコース

ストラスクライド大学のディプロマコースの“ディプロマ（Diploma）”とは資格のことであり、カウンセラーとしてのディプロマを受けるための修士レベルの教育課程である。フルタイムが１年間、パートタイムが２年間のコースで、通常１年の延長が可能である。同大学の同じ School of Humanities and Social Sciences には２年間のカウンセリングの修士課程が併設されている。ディプロマコースに入学するための要件は学部卒あるいはそれに該当する社会経験をもっていること、および一定の機関においてカウンセリングの基本技能についての教育を受けていることである。入学試験は口頭面接と志願動機・個人的経験等の論述レポートの提出である。

2. カウンセラー（Counsellor）と臨床心理士

ここでいうカウンセラーとはPCA（Person-Centred Approach）のカウンセラーのことを指す。その点で、わが国における臨床心理士とは随分異なる。臨床心理士の４つの大きな業務および技能が①心理臨床面接、②心理査定、③地域臨床、④調査研究となっているのに対して、ストラスクライド大学において習得する技能は①のみ、それもPCAというオリエンテーションに限定されている。ただし、コース便覧（course handbook）にはこのコースの社会的使命は地域及び世界に奉仕することと書かれており、以下に記述するThe Mission and Values of the Counselling Unitには「私たちの活動をカウンセリングと心理療法に限定しない」と書いてある。実際、②③は内容によってはこのコースの教育に含まれるし、④に関しては研究知見を実践に活かすための授業も行われている。

就職先はカウンセリングの修士課程を修了した場合と基本的には同じであるが、実際はディプロマコースを修了して働けるのが地域の施設（公共のもの、病院など）が中心であるのに対して、修士課程修了者は開業を含め、職場の幅が広いとのことである。

3. コース便覧（course handbook）

本学の専門職大学院と同様にコース便覧が配布されるが、幾つか注目すべき違いがある。以下、簡単に紹介する。

1）The Mission and Values

次の8つが掲げられている。Valuing Each Person, Supporting People's Choice, Being Real, Respectful Relating, Sharing Power, Being Open to Experiences, Valuing Diversity, Recognizing the Rights of Others。一見、民主主義の価値観のようにも聞こえるが、Respectful Relating（人への尊敬のある関わり）、Being Open to Experiences（経験に開かれていること）などにPCAらしさが現れている。

2）Training

統合（high integrity）と体験性と関係性（experiential and relational）が強調されている。様々な授業が繋がりをもって行われ、そして学びは体験的で関係を通して起こる、ということが大事な意味をもっているという。個々の学生が学生や教員との間で深く出会う環境を提供し、学生がそれぞれ自分の能力を発展させたい、と書いてある。

3）The Core Theoretical Model underpinning the Course

教育内容だけでなく、学生と教員との関係においてもPCAは実践されると書いてある。その一面として個人と個人の関係が強調されている。教員は学生への対応（responsible to）はするが、責任は持たない（not responsible for）、と書いてある。興味深い記述がある。過去にある学生がコースの終わりの時期になって「教員は自分に十分付き添ってくれない」と不満をぶちまけたことがあった。自分たち教員はその学生に付き添わなかったことが問題だとは思わないが、対応（responsible to）出来なかったことが問題だと考えている、と書いてある。そして、「このコースは学習に自分で責任を持てる学生には素晴らしい機会を提供するが、受身で依存的な学生には残念な結果になる可能性が大いにある」と書いている。学生を個人として尊重する分、自分への責任があることを言葉で明記する点や、経験から自分たちがこのように学び、現在の指導体制に至っていることを学生に見える形で提示している点など、個人を重視したり、transparencyを重視するPCAの哲学を生きる姿勢を教育の中でも示そうとしているように思われる。

4. 授業の構成

コース便覧には先ず、知的な学びだけでは学びにならず、学生が自分自身で考え、感じ、行動することが学びを最大限にする、とある。

以下に授業の形態を紹介する。

1）Large Group Meetings and Encounter Groups

2）Personal and Professional Development Groups

便覧によると両者には次のような説明があるが筆者には違いが判然としなかった。

1）コース全員による定期的な集まりで教員も2人以上が参加し、非構成的なコミュニティグループである。このグループは訓練課程で様々な機能を発揮しうるが、特に自己成長のための強力な力を持っている。一方で全体で決定を行ったり、理論と体験の両方の要素を探求する場でもある。グループが進むと自己概念を変化させるための探求の場になる。

2）このグループの目的は学生が自分の成長と治療的に人と関わる能力を探求するために学生が互いに深く知り合う場面を提供することにある。なかでも、PCAのカウンセラーとして効

果的に働ける能力を高めるように、学生にとってクライエントとの実際の関わりやこの訓練コース自体によって喚起された意識的・無意識的な素材に取り組む機会となる。

3）ワークショップ

期間も内容も様々のワークショップがある。Robert Elliot 教授による Emotion-Focused Therapy（2003）、Mick Cooper 教授による Pluralistic Self（2010）などの最近の PCA の発展のワークショップがその創案者によって行われているもので、その意味で最先端の講義である。そのほかには、Pre-therapy（2002）や Person-centred Psychopathology、clinical application of Focusing という、昨今注目のテーマなども扱われている。

学生は基本的な理論などについての相当部分は入学時点で身につけ、その上で授業や課題（後述）の参考図書として読むことになっている。

4）講義

便覧で講義が4つ目に挙げられていることが興味深い。便覧には、理論を学ぶ上で講義は限定的な価値しか持っていないというのが私たちの考え方だ、と書いてある。講義は学生が興味を持てるように新しい領域を紹介する、あるいはワークショップをするには現時点では不十分という領域を紹介するためのもの、という位置づけである。

5）訓練グループ（Practice Groups）

これは特にコースの初期段階で、カウンセラーとしてのスキルの要素について学ぶ場である。reflection や観察の仕方、フィードバックの仕方などについて、学生は実際のカウンセリングの素材を持ち込んで質問し、議論して理解を深める。次に述べるグループスーパービジョンでのディスカッションの準備をするために、学生の状態に応じて議論や振り返りも行う。学生はクライエントとの援助実践の前にこのグループのなかで少なくとも5時間のセラピスト体験をすることになっている。更に、スタッフの仕事はカウンセリングの進み方は何百とあることを自覚し、各学生が自分のカウンセリングを発展させるよう援助することだという、いかにも PCA 的な教育方針が書かれている。

6）学習グループ

授業時間以外に小グループを作り、著書の理解を議論によって深めるものである。初期の段階では Axline（1947）と Mearns & Thorne（2007）を読む。学生1人では手ごわい本もグループで読むことで生き生きとした理解となると便覧には書いている。

7）日記（Personal Journals）

このコースの期間中、日記を取ることを強く勧めている。自分自身の体験や気持ちを振り返るのに日記はとても有用だとしている。そして、それは後に述べる自己評価（Self-Appraisal）を行う上でも欠かせない、と位置付けられている。

8）スーパービジョングループ

これは学生10名ずつに分かれるグループで各グループに同じ1名の教員がついて毎週1回行われるものである。他のグループや授業（学習グループ以外）は30名全員が参加するものがほとんどなので、その点、このグループは少人数（と言っても10名だが）らしい親密さがある。日本的に言うとゼミ的な雰囲気が最も漂っている。ここでは、先ず、全員がそれぞれのケースワークのことの現段階での報告やちょっとした質問をするなどして、全員でやっていることを共有する。そして、そこからが本番で、実際のクライエントとの面接を IC レコーダーに録音したもののうち、重要と思われる部分を15分間提示し、ケースについて議論する。各学生はこの録音素材を少なくとも1年間に3回提示することになっている。状況によっては逐語を用意することもある。カウンセリング実践を

始める時期についてもこのグループで、各学生の準備状況を考慮して学生と教員との話し合いで決める。

筆者が参加させてもらったのはLorna Carrick先生のセッションだったが、先生のコメントは少なく、教えるというよりは、支える、経験を伝える、というようなものであった。むしろ、学生同士が議論するのであるが、学生も理論的に正しいことを議論するというのではなく、それぞれが担当のカウンセラーを支えるということを中核において議論する。学生自身が他者からのフィードバックを加味しながら自分でケースを振り返るようにできることが大事だ、と便覧にも書いてある。しかし、初期段階ではスキル面が学生の関心になるので、それについての議論が中心になる。

9）カウンセリング実践

本学でいうところの学外実習に当たるが、必ずしも学外ばかりではなく、学内に設置されている外来クリニック（“Research Clinic”、所長Robert Elliot教授）での体験も、実習としてカウントされる。医療、福祉、教育関連の公共・民間の施設が実習場所である。カウンセリング実践の最低限の時間は、フルタイムの学生であれば1年間で120時間、パートタイムの学生は2年間で150時間以上である。

実習施設との交渉は学生自身がしなければならない。教員は実習施設と学生が交渉するための場を提供する。8月のある1日に学生受け入れを希望する実習施設が一堂に集まり、そこでそれぞれが説明をし、また大学側も説明をするとのことである。学生もそこに参加して、自分の申し込みたい実習先を選ぶ。学生自身が施設と交渉する作業は責任を持つ個人としての学生の成長を促すし、コース修了後の仕事先での現実により近いからでもある、と便覧には書いてある。つまり、このやり方は、実習施設と学生の間に難しい問題が起きて、それを学生自身が第3者を介さずに解決する場を与えるものであり、それはPCAの哲学の一部として統合されている、と便覧には書いてある。なお、訓練生カウンセラーというポストを正式に置いている機関もある。

カウンセリング実践の始まりを決めるのもこのグループであるが、学生はそれまでに自分に能力があることをコースの教員たちや他の学生たちに色々な形で示しておくこと、また、自分がカウンセリング実践に入っていける状態にあることを、授業の中できちんと言葉にして伝える（レポートかプレゼンテーションかは不明）ことが求められる。準備が出来ているかが分かっているのは学生自身である、と便覧には書かれている。

10）個人スーパービジョン

上記のスーパービジョングループとは別に学生は個人のスーパーバイザーを持たなければならない。少なくとも8セッションに1回はスーパービジョンを受ける必要がある。スーパーバイザーの選択も金額の交渉も学生が自分で行う。学生はスーパービジョンについてのワークショップを受けた後、本コース作成の基準を満たしたスーパーバイザーの一覧を配布される。カウンセリング実践を始める前までにはスーパーバイザーとの交渉が終わっていなくてはならない。また、スーパーバイザーと学生とのやり取りの内容は基本的に秘密が守られる構造であるが例外が3点ある。1つは、スーパーバイザーは学生がスーパービジョンを必要最小限の回数を受け、スーパービジョンを活用していることをコースに伝えることは出来る、2つ目は学生が危険なあるいは倫理に反する行為を行っている場合はコースに伝えることが出来る、3つ目は学生が困難な状態にある時にはコースからスーパーバイザーに伝えることが出来る、ということである。

5. 提出課題

コースの中で提出を決められた課題があり、あらかじめ提出期限も決められている。それぞれに参考にすべき著書のリストも挙げられている。

課題1）'The Therapeutic Conditions'

自分の人生体験とカウンセリング実践を引用してロジャーズの6条件について論ずる（3000-3500words）。26冊（研究論文も若干含む）の参考文献が挙げられており、それらを引用しながら書くことが求められる。

課題2）Therapeutic Process —Counselling Audio/Video Analysis

最近のカウンセリングのビデオあるいは音声の記録のうち15分間を抜粋して逐語も配布して、授業の中で流し、自分のそのケースへの理解を論ずる（4000-4500words、逐語は含まず）。批判的に検討できること、また、個人スーパービジョンをどのように活用できているかも理解できていることを論ずる。これはうまく行ったセッションの提示よりも、学生がどのくらい批判的にものを見つめることが出来るかが中心課題である。

課題3）The Personality Theory underlying Person-Centred Counselling

PCAの成長・人格理論を批判的に検討し、自分の考えを論じる（3000-3500words）。自分自身の個人的体験とカウンセリング実践を引用し、ロジャーズ理論を相当部分にわたって批判する。19冊の参考文献が挙げられている（課題1と重複するものもある）。

課題4）Counselling Case Analysis —A Case Study

ある程度の期間にわたって行われたある事例について経過とスーパービジョンを批判的に検討し、自分のクライエントへの影響を理解するための課題である（3000-3500 words）。全プロセスにおける様々な局面とその結果、またスーパービジョンの影響を厳しく検討し、可能ならばクライエントからのカウンセリング終了後のフィードバックも入れて、検討することが求められる。14冊の参考文献が挙げられている。

6. 自己評価（Self-Appraisal）

学生はコースの最後に自分自身が、ディプロマ取得を出来るかどうかを自己評価する。そこには、このコースでの学びの基準を満たしたならば、学生は教員からの評価におびえて自分の短所を隠して長所を誇張するのではなく、学生自身が自分の能力とディプロマ授受の最良の評価を下せるはずである、という考え方がある。具体的には学生は自己評価の論文（6000-10000words）の提出を求められ、それをもとにスーパービジョングループの中でも自分自身についての評価のプレゼンテーションを行う。そこにはコースでの学びの評価、長所短所、今後の計画、異なる領域での能力の判断、そしてディプロマを受ける時期（更に学びを延長すべきかどうかなど）、について書く。その準備の最終段階では各学生が担当の教員や他の仲間の学生とアポイントをとってreadinessについて評価しあう。教員はそのために2日ほどを割いて学生との話し合いの時間を持つ。

筆者が参加したのはLorna Carrick先生の最後のスーパービジョングループにおけるSelf-Appraisalのセッションであった。それは、本当によく知り合った者同士が安全な雰囲気の中で自分の能力について表現していた。11名のうち（たしか）4名が、授受を先延ばしにしたいと言い、そのうちの3名は未だ受ける状態にないと言っていた。残りの1名は自分はダメだ（No）と言っていた。彼はいつかはディプロマを授かりたいが、更にこのコースで1年間学び

を延長したい、自分自身の心理的な問題もある、というのが理由だった。筆者から見ると、この彼が最も深くシャープに感じる能力があるように見えていたので、彼の自身への判断は驚きでもあり残念でもあったが、彼ならそう思うだろう、と納得もした。

7. わが国の教育への示唆

ストラスクライド大学と本学では、資格制度や教育目標など色々な違いがある。ここでは、わが国の臨床心理教育にとってどのような示唆が得られるかについて検討したい。

1) 学生が個人として自分に対して責任を持つ

学生に対して責任を持った大人としての扱う点がディプロマコースの特徴の1つである。学生が学びや実習施設、スーパーバイザーとの交渉などに関して自分自身に責任を持つこと、教員はそれに対して責任をもたないこと、というのは、わが国でそのまま適用できないだろう。特に専門職大学院となると、文部科学省の外郭団体である第三者評価機関への提出書類が圧倒的に多い。そのかなり多くの部分が、教員が学生の教育に対して署名押印をするものである。これでは、学生は教員の押印をもらうことに注意が向き、自分自身で考えなくなるので、学生自身の自立性と責任を育てることははるかに難しいであろう。とはいえ、自分に責任を持つという考え方自体は日本でも必要である。それどころか、学部卒の20代前半の学生が大部分を占める本学では、そういう責任感を醸成することは、一人前の臨床心理士として自立するための課題でもある。つまり、言われるがままに受身的にやっていても、それでは「何の問題もない学生」というだけであって、自分に責任をもてる学生、ということにはならない。

具体的にはまずコース便覧に、そのような記述を増やすことは可能ではないだろうか。学生が能力を示すというこの考え自体も、その示した内容を他の人、すなわち教員が判断する、ということになるので、ストラスクライド大学のように学生の判断そのものを重視する考えとは異なるが、それでもわが国の教育としては重要な進展であろう。もちろん、学生が自己評価をすることを授業に組み入れている教員もわが国にいるであろうが、更に進める必要があるだろう。

2) 学びとは自分で学ぶこと

ストラスクライド大学では講義に限定的な意義しか認めず、スーパービジョンにおいても教員が必ずしも多くを語らないというのも特徴である。学生が自分で学んだと思えなければ学びにならない、ということを実践した教育である。学生自身にとって真の学びは学生の中で自発的に起こるものだ、という考えがある。これは、そのような学びができる学生を入試段階でのいかに選抜するか、という問題に行き着く。

3) 自分を的確に批判する能力

課題の中にロジャーズ理論の批判を行うものがある。ストラスクライド大学はロジャーズ派の大学であるのにこのようなことを行うのは矛盾しているようである。しかし、考えてみると、批判する能力が育つことが、その理論の長所も的確に理解することの助けになる。また、西欧では批判が出来ることが大学院生の1つの能力として一般的に考えられている[1)]。ただし、的確な批判が出来ることが重要なのであって、単なるクレーマーであっては意味がない。したがって本学では、的確な批判を行うための知的なディスカッションなどを行いながら、自分独自の批判的な視点を確立し、それを論述する力を養うような授業が出来るのではないか。特に、言葉で正面から批判することは日本人の苦手とするところである。それは一方でプラス面もあるが、それが甘さを生み出していることもあるので、この点、日本文化も考慮に入れて、批判を取り入れる教育を行う必要がある。

そういうロジャーズ批判などを行いながら、

自分がしていることを批判的に検討できる能力を育成することがストラスクライド大学での大きな特徴であろう。学生が自分を率直に語る場があることで、自分自身を安心して批判的に検討できる。つまり、信頼感のある場を作る必要がある。これは教員の学生への姿勢を、評価的なものから安心感のあるものへと比重を移すことである。これは評価システムとも関係するので簡単ではないが、より安心感のある雰囲気を作り出すことは可能であろう。専門職大学院のガイドラインは基本的に評価的であり、競争的な要素を持ち込むことで質を上げることを目指している。学びを最大限にするために競争と安心感をどう考えるかが問われている。

4）自分の責任で自分のやっていることを検討できる能力

上に述べたように自分自身への責任、自分自身の批判的検討という２つは、最終的には、学生が自分の臨床体験を自身で批判的に検討する能力を育てようとしているように思われる。「理論や教員の言う通りにやったのですが、上手くいきませんでした」、というようなことは人の人生を相手にする心理臨床では本来通用しないはずである。自分を批判的に検討できる能力を持つことが一人前になる、ということである。本学でもそのような面を更に膨らませる工夫をすべきであろう。

5）理論と経験のつながりの強調

ストラスクライド大学では自分の経験と学んだ理論をつなぐように促される。つまり、単に技能だけを学ぼうとしても、学びにならないのであって、自分自身の個人的な経験と有機的な関連をもてることで学びが深まり、技能が高められる、という考え方がある。本学での授業においてもディスカッションやレポート課題に自分個人の経験をいうものをもっと意識させながら技能課題の習得をさせることは可能であろう。

6）実習施設

ストラスクライド大学では学生受け入れを希望する実習施設のために１日を設けて、そこで大学側と実習施設側がプレゼンテーションを行い、学生もそれに参加する。これは学生が自ら考えて選んだり、実際の社会での状態を知ることを促すだろう。また、実習施設確保の上でもこれは検討してよい事項かもしれない。

7）入学以前

ストラスクライド大学のディプロマコースは１年課程である（フルタイムの場合）。短いがその中でカウンセリング実践を120時間以上も行う。筆者が参加させてもらった時は既にコースの終わり近い時期であったとはいえ、ロールプレイを拝見して驚いた。素晴らしく上手かった。単にreflectionするのではなく、自分自身で深く感じながらクライエント役の学生の話についていっていた。学生は既に入学以前にスキルのトレーニングを別の施設で受けているから、というのがその理由の一つであろう。

本学の場合は学部教育で更にカウンセリングの実際的な練習を行うことが可能ではないか。また、他大学からの学生にもそのような資格要件を定めるなりすることで２年間の課程が一層充実するのではないだろうか。つまり、入試に更に具体的な要件を設けることで入学以前の学びを高めておくのである。

謝辞

本稿を書くに当たり、ストラスクライド大学のディプロマコースの修了生である田代千夏さんに色々と示唆を頂きました。ここにお礼申しあげます。

文　献

Axline（1947）Play Therapy. London: Ballantine Books.